

Vol.57-1

学びを「自分ごと」としてとらえる



教育点描	調理から広がった科学への興味	露久保 美夏	2
学びを自分ごととしてとらえる Q&A			3
特集	「自分ごと」として取り組むことの大切さ	安東 茂樹	4
教育の目	技 新しい価値の道具を自ら創り出す技術分野の教育	三浦 登	6
	家 子どもたちが「自分ごと」として取り組む学習を促す 教師の手立てとは	堀内 かおる	8
実践事例	小家 問題解決的な学習過程で確かな資質・能力を育む ～オンリーワン！ マイバッグを作ろう～	田中 裕子	10
	技 自ら学ぶ意欲を高める学習課題の設定 ー「アイデアを形に」 3D プリンタを使用した便利グッズの製作 ー	佐藤 敦	12
	家 自己評価力の向上に着目したワークシートの工夫	松原 三也子	14
インフォメーション			16



本資料は
「教科書発行者行動規範」に則り、
配布を許可されているものです。

開隆堂

小学生の頃、日常の中で経験したあるできごとが「調理科学」への興味のきっかけになっているのだらうと思います。ある朝、ふと「レモンミルクティー」を入れてみよう」と思いつきました。初めての味にわくわくしながらアツアツの紅茶に牛乳を注ぎ、レモン汁を垂らします。するとどうでしょう。みるみるうちにカップの中には見たこともないモヤモヤしたものとブツブツしたものが浮かんできたのです。カップの中の異様な様子にとってもとても驚きました。少しなめてみると食感にはざらつきがあり、味わうよりもその見た目のインパクトが強烈でやや怖くもあり、それ以上は飲めなかった…という結末となりました。

このできごとから、レモンと牛乳を一緒に入れても自分の好みの紅茶にはならない、ということを学んだのですが、同時に「あのモヤモヤは何だったのだろう」という疑問を抱え続けました。そして、数年が経ち、その疑問が解決される日が突然やってきました。家庭科の授業でのことです。牛乳にレモン汁や酢など酸性のものを加えると、牛乳中のたんぱく質が凝固する、ということを知った時です。

この瞬間、「これだ!」と、まさに点と点がつながった感覚になりました。正体不明のモヤモヤは、何も無いところからふいに湧いて出てきたのではなく、私が起こ



化学反応で変わる焼きそばの色

させた“反応”だったのです。もともと料理について関心を持っていたのですが、ただ作り方を知ってなぞるだけではなく、こうした現象の理由を知ることに特に興味を持っているのだと自覚し

たのもこの頃でした。料理は科学、とは言われますが本当にそのとおりだと実感し、そのおもしろさにどんどん惹かれていきました。それからはいろいろな食品や料理のコツといわれるものについて積極的に調べるようになります。半熟卵と固ゆで卵は何が違うのか、なぜ弱火でゆっくり加熱する必要があるのか、



砂糖の量で変わるケーキの膨らみ方

生地をねかせるのはなぜか…知りたいことはあふれ、夢中で関連書籍を読みました。細かな質問に答えてくださった家庭科の先生の存在も非常に大きかったです。

ただ、そうして調べていくうちに、自分が知りたいと思うことを「理解」するためにはさまざまな科学の知識が必要であることも痛感しました。すると、それまで化学や生物に対する興味はさほど強くはなかったのですが、次第に興味湧いてきたのです。調理を入り口にそれらの知識に接したことで難解だと思っていた分野への壁を感じるよりも、もっと理解したいという気持ちの方が強くなっていきました。私にとっては、調理科学への関心が、化学や生物、その他の分野への興味関心を増すことにもつ

ながっていたのです。きっと同じように食品や調理をきっかけに、科学に惹かれる子どもたちもいるのではないかと思います。

いつ、どこで夢中になるアンテナが反応するかは本人も周りの大人もわかりません。ある時点での興味や得意不得意の枠にとらわれることなく、ひとつでも「知りたい」「おもしろい」と感じるアンテナが反応する瞬間が増えたらいいなという思いを持ちながら調理科学を通して子どもたちとの時間を共有していきたいと考えています。



調理から広がった 科学への興味



つゆくほ みか
露久保 美夏

東洋大学食環境科学部食環境科学科。専門は調理学。大学で教育と研究を行いながら、子ども向けの講座を通して調理科学のおもしろさや五感を使って味わうことの大切さについて伝えている。

学びを自分ごと としてとらえる

Q&A

“子どもたちに学びを
「自分ごと」としてとら
えさせたいんだけど…”

“子どもたちに自分で
学ぶ力をつけていき
たいね。”



「自分ごと」って、どういうことなの？



家庭科は、生涯にわたって健康で豊かな生活を送るための生き方を学ぶ教科でしょう。何のために学ぶのか話し合ったり、**自分の生活とのつながりを考えたり**することで学習への関心が高まるんじゃないかな。



子どもたちと生活の中で困っていることを一緒に考えて、**子どものやりたいことや興味あることと学習が**つながるように授業を考えることで、自分ごとになっていくと思うけどね。



つまり、**子どもの目線に立って**、子どもたちが**今何を必要としているのか**を考えるということかな。



授業をつくるには、どうすればいいの？



学習課題が重要だと思う。

子どもの生活は一人ひとり異なるから、自分ごととして課題を追求するうえで、子どもの問いや思いをつなげることが大事だと思う。

具体例

例えば導入で、今の自分の生活に目を向け、思いを語らせ、現実とのギャップや問題点を話し合わせる中で、問いや願いが生まれ、課題につながると思う。学習課題が自分の思いややりたいことになると、自分たちで解決したいと思うよ。それに、新たな問いが生まれて子どもが自ら学びを深めていくんじゃないかな。

対話も大切だね。



子どもたちは生活経験も家庭環境も異なるから、仲間の考えを聞いた異なる生活を知ったりすることで、違いを認識し、何が問題か、どうすればよいかを考えると思う。

具体例

対話をする際、そう考える理由や根拠を検討すると、新たな見方や展望がもてるようになるし、自己理解・他者理解も図られると思う。それに、自分で判断することで自分ごとだと思うようになる。

体験的活動はどう？



家庭科は、具体的な体験を通してひと・もの・こととの関わり方を実感的に学ぶことを大切にしているんだよね。体験的活動を通して見方が揺さぶられ、自分はどうかありたいかを考えるようになるからね。これが自分ごとだと思う。

具体例

体験で終わらないことが重要だね。そのためには、なぜそうするのか、どのように役立てられるかを考えたり、生活で実践したりすることで、自分の力となると思う。これが家庭科の強みだね

「自分ごと」として 取り組むことの大切さ

1950年兵庫県生まれ。博士（教育学）。1974年大阪教育大学卒業。明石市立朝霧中学校教諭、神戸大学附属住吉中学校文部教官教諭、明石市立大久保中学校教諭、兵庫教育大学助教授、京都教育大学教授・副学長、広島国際学院大学特任教授を経て芦屋大学特任教授。主な著書に『新編 技術科教材論』竹谷出版（共著、2021）、『アクティブ・ラーニングで深める技術科教育～自己肯定感が備わる実践～』開隆堂出版（編著、2015）、『技術科教育はなぜ必要か ～人を育て文化を築く「ものづくり」～』竹谷出版（単著、2014）、『教授過程における技術的能力を高める教材』風間書房（単著、2006）がある。



芦屋大学
特任教授・
京都教育大学
名誉教授

安東 茂樹

1 はじめに

技術科教育の教育研究に携わって半世紀になる。現職教員として初任の頃から「ものづくり教育の面白さとやりがい」を感じ、変化することなく自分ごととして大切に持ち続けている。その要因には、ものづくり教育の創造力のダイナミックさや対面する生徒の顕著な成長に遭遇できる喜び等がある。その経験は、すべて「自分ごと」として私の生き方や考え方、人格にまで影響を及ぼしている。



2 若者を取り巻く背景から

高度情報化社会の中で、多くの若者の生活実態が変化している。時短や効率を求めることがトレンドとなり、同じことでも短時間で

対応するコスパ（効率主義、要領のよい生き方などのこと）に価値があると考えている。その結果、映像や画像を倍速視聴やネタバレ許容（視聴）で楽しむコスパ重視で、自分の好きなものにお金や時間、熱量をかける。日々の生活では、朝起きたらすぐインターネットにつなぎ、動画で寝落ちするまで一日中スマホを離さない。SNSの普及で、友達同士いつでも連絡ができ、それへの反応を求められる。そのため、流行っている映画やYouTubeを観ていないと友達と話が通じない、自己の存在を示すことができないと思う。若者は、共感することや承認されることで自己肯定感を持つとしている。

このように、間接的でバーチャルな世界が広がり、個々人の生き方に影響を及ぼしている一方、リアルな世界やリアルな生き方の大事さを再確認する傾向も散見される。そこで「自分ごと」という文言に焦点を当て、「自分ごと」として取り組むことの大切さについて考究する。



3 いま求められる「自分ごと」としての取り組み

これまで「他人ごと」という言葉は日常的によく使われてきたが、「自分ごと」は恒常的に使用されてこなかった。その必要がなかったからである。情報の供給過多で生活する中で、孤立感や無責任な風潮が蔓延する今こそ、「自分ごと」の大切さが浮上している。「自分ごと」のリアルな現実対応として、情報を選別し取捨選択する自身の課題とすることが求められている。

次に、「自分ごと」を取り上げている書籍から考察を加える。

桑畑英紀らは、企業（（株）電通）の社員の意識や行動を変革する手法として、「自分ゴト化」の取り組みでモチベーションの向上とともに、企業に対するロイヤルティの形成やソフトパワーの充実と競争力強化が実現すると論じている。社員が会社のブランドを実現する主体であることを自覚し、当事者意識を持って行動できる状態になることを「自分ゴト化」と定

義し、主体的に行動することの大切さを述べている¹⁾。

同じく企業の人材育成として、博報堂 DY グループエンゲージメント研究会では、人々は莫大な情報に囲まれ、メディアを通して流れる情報の 99% をスルーし、選ばれた 1% が「自分ごと」である。多くの人に伝播され、社会を動かすカギは「自分ごと」にあると論じている²⁾。次に、学校教育に関わって、菊地栄治は社会、経済、教育等のあらゆる現象の課題や問題を「他人ごと≒自分ごと」、つまり同一化する必要性を述べ、すべての社会領域の多元的生成モデルに基づいて「自分ごと」の意義を論じている。「他人ごと≒自分ごと」となるためのフェーズとして、Ⅰ．「他人」と「自分」は同じ人間だが「いかにわかっていないか」を自覚、Ⅱ．「他人ごと」と「自分ごと」の出来事を重ねられる空間、Ⅲ．身体レベルを含め「切実さ」次元での出遇い、Ⅳ．「他人ごと」や「自分ごと」の背景にある構造に踏み込む学び、Ⅴ．「自分ごと」として気づいたことを「他人ごと」へと転換するプロセス、の重要性を述べ、教育改革が疎かになっていると警鐘を鳴らしている。その課題を、①主体的・対話的で深い学びを「他人ごと≒自分ごと」で再構築できるか、②学校で起きている課題について、他人ごとをいかに自分ごと化できるか、③「社会の限界性」をふまえた社会的課題の解決という視点で捉えられるか、と挙げている³⁾。これらは「自分ごと」の大切さを求めるフェーズと、新しい教育の

在り方に示唆を与えている。

新しい教育の学習評価の視点である「主体的に学習に取り組む態度」の「主体的」は「自分ごと」に通じ情意を含めた態度形成と考えられる。具体的には、学校教育における学び合いは、社会のこと、政治経済のこと、友達や地域の人々のこと等、すなわち人間生活に関わる出来事で、そこで生じる課題を「自分ごと」としてとらえられる力や態度を求めている。鈴木秀幸は、学校教育の究極の目標は、生徒が自立した学習者になることで「主体的に学習に取り組む態度」の育成をめざす取り組みであると論じている⁴⁾。このことから、「自分ごと」の究極の位置づけは、学校教育の目標であり、学習指導要領が求めている教育課題と考えられ、具体的には「主体的に学習に取り組む態度」を育むことである。



4 まとめ

人は集団（社会）の中で暮らしている社会的動物と言われ、個性や自分の特徴を示し、他と違う自分の存在を大切に生きている。そこに「自分ごと」として取り組むことの大切さが存在し、他者との関係で社会生活を送り、多様な課題を「自分ごと」として主体的に取り組む態度が求められる。

本稿をまとめると、以下のようになる。

○若者の多くは、SNS の普及などにより、「いいね」などの承認欲求を満たすとともに、共感

する生き方を求められている。

○企業での変革や人材育成及びブランド実現は、働く個々の社員が当事者意識を持って「自分ごと」化して行動することがカギになる。

○あらゆる現象において「他人ごと」と「自分ごと」を同一フェーズに位置づけ、多様な課題を「自分ごと」として「主体的に学習に取り組む態度」の育成を求めていく必要がある。

以上のことを手がかりに、「自分ごと」として取り組むことの大切さを再確認することが重要で、これからの課題でもある。その追求を通して、人間同士が関わりながら互いに共感や承認し合って、個々に自己肯定感の持てる社会や環境をつくっていくことをめざしたい。

参考文献

- 1) 桑畑英紀・津布楽一樹・谷昭輝・笹木隆之：『自分ごと化 社員の行動をブランディングする』ファーストプレス、2011
- 2) 川名周・藤井久・波多野昌樹・山下史郎・田中双葉・久地楽雅也・森下茂雄・浜田茂：『「自分ごと」だと人は動く 情報がスルーされる時代のマーケティング』ダイヤモンド社、2009
- 3) 菊地栄治：『「他人ごと≒自分ごと」教育と社会の根本課題を読み解く』東信堂、2020
- 4) 鈴木秀幸：『「主体的・対話的で深い学び」の意義－社会的構成主義と形成的評価の視点から－』、pp.7-9、『指導と評価』№814、図書文化、2022



◀ 詳しくはこちらへ



新しい価値の道具を 自ら創り出す 技術分野の教育

1

道具を創る動物としての人間

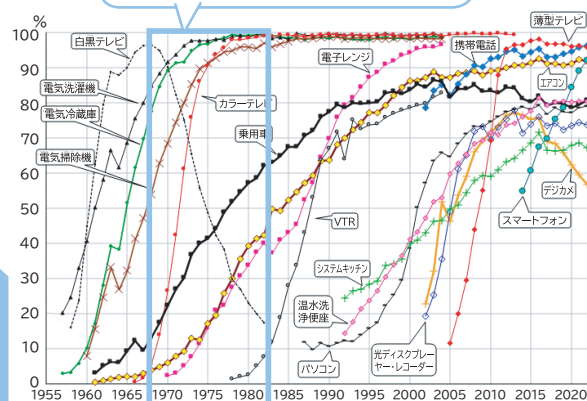
「人間は、道具を創る動物である」とは、雷雲帯電を照明し避雷針を創ったアメリカの科学者フランクリンの名言です。

道具を創り使うという能力は、人間と他の動物との著しい違いの一つです。非力な動物である人間は、道具を使うに加えて、道具を創り出す営みによって、他の動物にはない「文明」を築いてきました。

どの動物より速く走る自動車を創り、空を飛ぶ飛行機という道具を創りました。1903年、ライト兄弟が初めて空を飛んだのは12秒間でした。しかし、66年後の1969年に人間は月に立ち、それから53年後の現在は、宇宙ステーションを往復しています。

科学技術の発展は、道具を創り出すことで加速化しています。その基本として、道具を正しく使うことができる知識と技術が必要です。

1970年～80年に家電製品の種類と普及率が急激に上がっている。



(注) 二人以上の世帯が対象。1963年までは人口5万人以上の都市世帯のみ。1957年は9月調査、58～77年は2調査、78年以降は3月調査。05年より調査品目変更。多くの品目の15年の低下は調査票変更の影響もある。デジカメは05年よりカメラ付き携帯を含む。薄型テレビはカラーテレビの一部。光ディスクプレーヤー・レコーダーはDVD用、ブルーレイ用を含む。カラーテレビは2014年からブラウン管テレビは対象外となり薄型テレビに一本化。
(資料) 内閣府「消費動向調査」

Fig 1 主要耐久消費財の世帯普及率の推移
(1957年～2022年)

2

持続可能な社会の構築

技術・家庭科技術分野では、旧学習指導要領平成20(2008)年3月告示)解説の「材料と加工に関する技術」に「持続可能な社会の構築の観点から」とあり、すでに持続可能な社会の視点が「自分ごと」の学習内容として示されていました。

文明を築くプロダクトやデザインを創るエンジニアは、制約条件をもとに設計・製作を行います。主な制約条件の要素は「安全」を第一とし、今までは利便性や効率、利益が優先されてきました。しかし「環境」や「持続可能性」が重要視されるようになり、制約条件の内容や優先順位の見直しが求められてきました。

技術分野の学習内容に「持続可能な社会の構築」が、他教科より約10年早く示された理由は、技術分野が文明を築くための道具を創る営みを学ぶ教科であることだと考えられます。

3

求められる最適化

機械設計・製作などを通して、エンジニアには顧客の要望、予算などの制約に対処しつつ、「最適化」が求められます。特に、技術的な制約の問題に直面したときには、優先順位の高い要素から選択して「最適化」を行います。最適解は社会の変化に大きく影響を受けます (Fig 1、Fig 2)。

1970年～80年に家電製品の種類と普及率が急激に上がっていることがわかります。それに伴い、電力消費量が約2倍になってきます。この時代の社会からの要求として、「環境」や「持続可能性」

(1970～80年頃)
生産性や効率
が「最適化」の優先

(2000年代以降)
社会からの要求に省エネ、3Rなど
持続可能なキーワードが多くなり、
「最適化」の優先順位に変化

一世帯あたりの電力消費量の推移

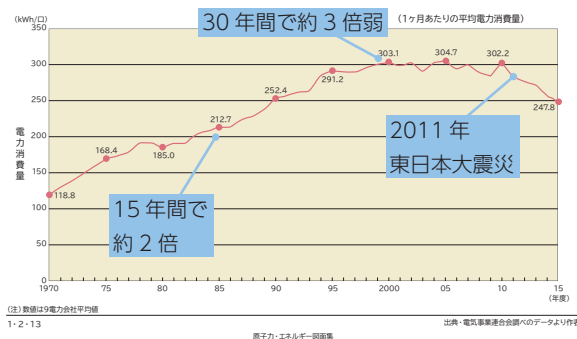


Fig 2 一世帯あたりの電力消費量の推移 (1970年～2015年)

より、生産性や効率が優先されていました。

2000年代に入ると、新たな家電製品の普及やエアコンの普及率が約90%となり、1か月の電力消費量が300kWhを超え、社会からの要求に省エネ、3Rなどのキーワードが多くなり、「最適化」の優先順位に変化をもたらしました。

Fig 3は、テレビの消費電力量の推移です。省エネは、身近な問題としては家計の負担減ですが、電力供給の事情や地球温暖化の影響が社会的な要求として求められていることが「最適化」の変化につながっていると考えられます。

こうしてエンジニアは、社会からの要求をもとに電力消費量を減らす技術開発に挑み、何を優先順位にするか選択して、「最適化」された道具を創り出しています。

4

身の回りの「技術の最適化」に気づく学び

生徒たちに「技術の最適化」を気づかせるためには、「社会が技術に求めている要素」(社会からの要求)を学ぶ必要があります。身近な製品を教材として、それらを比較検討することにより、年代によって「技術の最適化」が変化していることを実感できるのではないのでしょうか。

前節で例示した家電製品等の普及率や電力消費量の推移から、身近に「技術の最適化」が変化していることに気づかせ、学習を「自分ごと」として捉えさせる。「技術の最適化」が変化していることを理解した視点で、身近な製品の中にある技術を最適化している要素を発見し比較検討する。そして、優先順位の高い要素を分析することが、「技術の見方・考え方」の気づきになると考えます。

1981年より東京都立中学校で教諭、校長を務め2018年3月退職。その間、第23代全日本中学校技術・家庭科研究会会長に在任。2018年4月より工学院大学教育推進機構教職課程非常勤講師。

三浦 登



◀ 詳しくはこちらへ

●テレビの年間消費電力量の推移

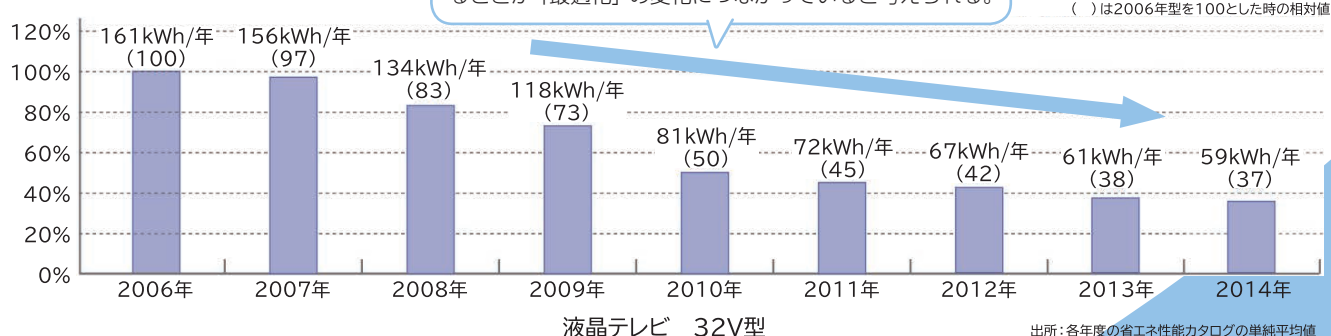


Fig 3 テレビの年間消費電力量の推移 (2006年～2014年)

年間消費電力量は、1日あたりの平均視聴時間4.5時間、平均待機時間 (EPG取得時間を含む) 19.5時間を基準に算出したものです。

子どもたちが「自分ごと」として取り組む学習を促す教師の手立てとは

1

主体的・対話的で深い学びを目指す授業の真実

改訂版学習指導要領で提起された、授業は主体的・対話的で深い学びをもたらすように計画されるべきであるという考え方が広く浸透し、今日に至っている。教師の一方通行の講義が中心となるような授業ではなく、子ども同士の話し合いや発表を踏まえた双方向の交流を取り入れた授業へと、授業観・指導観の転換が図られてきた。

今なお引き続きコロナ禍にあって、子どもたちの交流や体験的な活動に対する制約は否めない。しかしそれでも、多くの教室では、教師が配慮しながら、家庭科、技術・家庭科家庭分野（以下「家庭科」と称する）の子どもが主体となる学びをつくろうと授業の工夫がなされてきた。

筆者は、さまざまな機会に、小・中・高校すべての校種の家庭科の授業を参観する機会を得て、それぞれの学校種における子どもたちの発達段階を踏まえた家庭科教育の特徴について考えてきた。近年の「主体的・対話的」な活動を取り入れた授業を参観する中で、ふと思うことがある。それは、本当にここで子どもたちは「主体的」になっているのだろうか、「主体的にさせられている」のではないかと、という疑問である。同時に、「対話的」というけれど、話し合いが設定されていれば対話が成り立つというわけではない。教師によって、授業という枠組みの中で、やむを得ず「意見交換を余儀なくされている」という状況になってはいないか？という疑問が浮かぶことがある。このような問いが浮かぶ授業では、子どもたちは一見して活発に交流をして、てきぱきと考えをまとめて発表することはできているように

見える。しかし、子どもたちの発表を聞いていると、どこか一般的で妥当な回答になっていて、「この子ならではの」「この子の家庭ならではの」の実感が伝わってこないのである。授業中の教師の指示に対し、熱心に取り組んでいたとしても、子どもたちが自分自身や自分の家庭生活に目を向け、自分にとっての課題と受け止めて考えていなかったとしたら、そして授業だから、教師に指示されたから、という理由以上の意味を見出していないとしたら、「主体的」に学んでいるとは言えないだろう。「対話」にしても、自分の考えを友達に聞いてもらい感想を言ってほしい、友達の意見を聞いてアドバイスしたい、という心の中の強い思いに動かされて取り組まれているだろうか。子どもたちの「交流したい」という気持ちの本気度が、問われるように思う。教師は、いま展開中の授業の中で子どもたちの本気度がどのくらいの域に達しているのか、その授業の真実を見計らいながら先に進めていく必要がある。

2

学習が「自分ごと」になるということ

人は誰もが、自分にとって「意味がある」と考えることには熱心に取り組み、成果を学びとして吸収し、そうでもないことはやり過ごしているのではないだろうか。これは、大人も子どもも同様で、学びが本当に自分にとって生きて働く力となるためにはまず、「自分ごと」として受け止められるかどうかにかかっている。自分ごとの反対は「他人ごと」、それはすなわち誰かほかの人のことであって自分には関係ないことになる。自分にかかわる、意味のあることとしての「自分ごと」のとらえがなければ、

学習者は本気でそのテーマと向き合えないし、自分にとっての課題もつかめないだろう。子どもたちにとって、教科書に載っているから、先生が言うから、という外発的な動機付けでもとりあえず授業は成立するかもしれないが、ほんとうにその子どもにとって意味のある学びにはならない。

もちろん、いつも子どもたちのほうから問いが生まれ探究が始まるような授業でなければならないというわけではない。導入の扉を開くのは教師の役割であり、教師からの問題提起は重要である。ただその際に、教師が提起する学習場面の設定がどのくらい一人ひとりの子どもの日常に沿ったものであり、子どもたちの課題意識を耕す余地を含んだものになっているだろうか。そして取り組みの道筋において、どれくらい子どもたちが自分自身や家族の実態を踏まえて、自分で考えて見通しを持てるようになっているだろうか。教師がすべて手順を決めて、そのとおりに間違わないように行動することが求められるような授業では、子どもは教師の想定内の枠の中で考えざるをえない。そうではなく、考える枠自体を子どもたちが自分で工夫してつくり上げるようにしてはどうだろうか。つまり、ほんとうに「主体的」であるためには、学びの方法自体を子どもたちが自分で考える余地が残されていることが望ましい。

3

「自分ごと」と向き合う二つの道筋

それでは、どのようにしたら子どもたちにとって「自分ごと」となる授業が成立するのだろうか。子どもたちが「自分ごと」として物事をとらえて向き合う二つの道筋がある。次に、それぞれについて考えてみたい。

①テーマ自体が自分自身のこと、自分と家族のこと に向き合う場合（直接的な自分ごと）

取り組むテーマ自体が「今の自分」「今の家族」についてのことであり、自分自身や家庭生活を見つめることから自分や家族にとっての課題が見出される。学習への取り組みが、自分にとって具体的なかわりのあることだと実感できるものである。この

ようなテーマを投げかけるにあたり、このテーマを「いま、考えることの意味・意義」すなわち学習の目的が、子どもたちと共有されていることが大前提である。

②共感をもって相手のことを理解し考えようとする 場合（間接的な自分ごと）

地域の人々とのふれ合いのような、相手意識を持って取り組む学習が自分ごととなるためには、相手が「他人」ではなく、自分にとって「意味ある存在」として受け止められている必要がある。具体的な相手の人となりが想像できて、その人の置かれている状況や地域の実態に共感することによって、誰かの話ではなく「自分ごと」になるだろう。このような共感力（empathy）は、家庭科教育においても不可欠である。子どもたちには、家庭科の学習において、他者の生活についてその人の立場に立って考えてみる機会を与えたい。相手の立場に立ってみることから、自分にもつながる課題をつかみ考えるための手掛かりを得ることができるだろう。

①と②の「自分ごと」となるための道筋を授業のなかでつくっていくのは、ほかならぬ家庭科教師自身である。その時、子どもたちが自分で考え、体験を通して実感できるような授業を構想したい。自分の目で見て感じて確認した時に初めて、その対象が自分ごととなっていく。自分ごととなり問いが生まれ、向き合うべき課題として認識されることから、学習過程が始まる。教師は、子どもたちの身近なテーマを設定し、子どもたちにとって意味ある存在となる他者と出会わせ、子どもたちの視野を広げてほしい。同時に、家庭生活の背景となる社会状況や生活実態に目を向けさせ、子どもたちの中に問いが醸成される支援を行ってほしい。

横浜国立大学教育学部教授
日本家庭科教育学会会長

堀内かおる



◀ 詳しくはこちらへ

～オンリーワン！ マイバッグを作ろう～

佐賀県神埼市立
千代田西部小学校校長
田中裕子

1 はじめに

佐賀県小学校家庭科部会は、令和3年度の九州大会（誌上発表）を機に、「暮らしを見つめ豊かに創造する児童の育成」をテーマに、「主体的・対話的で深い学び」を実現するために表1の学習過程に取り組み、実践を積み重ねてきた。この「課題設定」→「習得」→「活用1」→「活用2」からなる学習過程は、課題設定から日常生活における実践の一連の過程を踏み、児童自らが問い（課題）をもって知識・技能等を習得し、それらを活用するなかで必要な資質・能力を獲得することをねらいとしている。

2 指導のポイント

本稿では、原口百合子教諭（元みやき町立三根西小学校）の実践である題材「オンリーワン！マイバッグを作ろう（6学年）」を取り上げ、学習過程に沿って児童が身近なことやものと関連付けて身に付けた知識及び技能をどのように作品に生かしていくのかや自分ごととして学習することの大切さや授業においてどのようにして取り入れるかの指導のポイントを解説する。

（1）「題材を貫く問い（課題）」の設定

課題設定の場面では、さまざまな具体の布製品を示し、「快適・安全」や「持続可能な社会の構築」の視点から生活を見直すことで、あらためて布製品のよさに気付くようにする。その後、「どんな袋物を作りたいのか、袋物を作るうえで知りたいことや学びたいことは何か」という話し合いを深め、「題材を貫く問い（課題）」を自分たちで作るようにする。その際、学習の見通しを持つことが重要である。

問い（課題）：「自分に必要な袋を作るためには、どんな知識や技能が必要だろう」

～オンリーワン！マイバッグを作ろう～



箱は入ったけど、このままじゃひもを絞れないな。

出し入れしやすくするには、どのくらいの大きさにしたらいいだろう。

算数で学習した展開図だとぴったりすぎるよ。箱の厚みも考えないとね。

（2）習得場面における工夫

習得場面では、三つ折りや口あきの縫い方などの理解を深めるために、不織布を使って袋を作る体験を取り入れる。必要な大きさを決めるために試行錯誤し、新聞紙を折ってホチキスで止め、ゆとりや縫いしろの必要性等を実感することが、活用できる知識・技能につながると考える。

（3）活用場面（【活用1】【活用2】）における工夫

【活用1】では、習得した知識・技能を生かして「自分の袋」を作ることに取り組む。型紙を作ったり、縫う順番を確認したりする等の体験的な活動を通して他者と学び合うことにより、活用する力や課題を解決する力の育成を目指している。

【活用2】では、どのように知識及び技能を使えば生活がよくなるかを考え、実践する力を養うために、地域の方にオリジナルの手作り布袋をプレゼントするパフォーマンス課題に取り組む。

対象となる方に事前にリサーチをしたうえで製作し、プレゼントした後に感想を聞くという一連の活動は、課題解決を通して深い理解だけでなく、主体的に学ぶ意欲の向上につながると考える。

（4）評価の工夫

一連の過程において「資質・能力開発ポートフォリオ」（Web ページ図1 参照。以後、ポートフォリオ）を活用して自己評価活動を強化した。ポートフォリオへの記述によって、児童が各ステップの作品や記述を比較しながら学びを振り返ったり、必要

な知識・技能や工夫したことを確認したり、自分の成長を実感したりするなど、効果的な自己評価が可能となる。また、新たな気付きを得たり、製作で必要なポイントをつかみ、次の製作に臨んだりする自己調整力をつけることにもつながると考える。

3 授業の実際の様子

【活用1（いかす）】（5～8時）

弟が好きな絵の布で通園バッグを作ろう

○型紙を作る



スケッチブックを持ってきて大きさを考えよう。

まちをつけるからもう少しゆとりがあるといいかな。

○布を裁つ

○縫う順番を考えながらミシンで縫う

バッグはわきは上までぬうんだね。

ナップサックだからわきを割ってから三つ折りをするんだね。



前時に学習したゆとりをもたせることや縫いしろを考えて型紙を作るという経験を生かし、自分が作りたい布袋の型紙を作った。新聞紙や不織布を使い、試行錯誤できるようにした。ミシン縫いにおいても

袋によって縫い方が違うため、製作過程の相違をグループで確認し合いながら進めていた。

【活用2（つかう）】（10～11時）

パフォーマンス課題

地域の方に使ってもらえる布袋を作ろう

○どんなものが必要かリサーチをする

C: 祖母にどんな袋がほしいか聞いてみたよ。

C: 歩く時にスマホケースがあると便利そう。

C 使いやすいようにひもの長さを長めにしたほうがいいんじゃない？

○これまでの学習を想起しながら製作する

○地域の方に手作り布袋を渡す



朝の立ち番に使ってもらったらうれしいな！

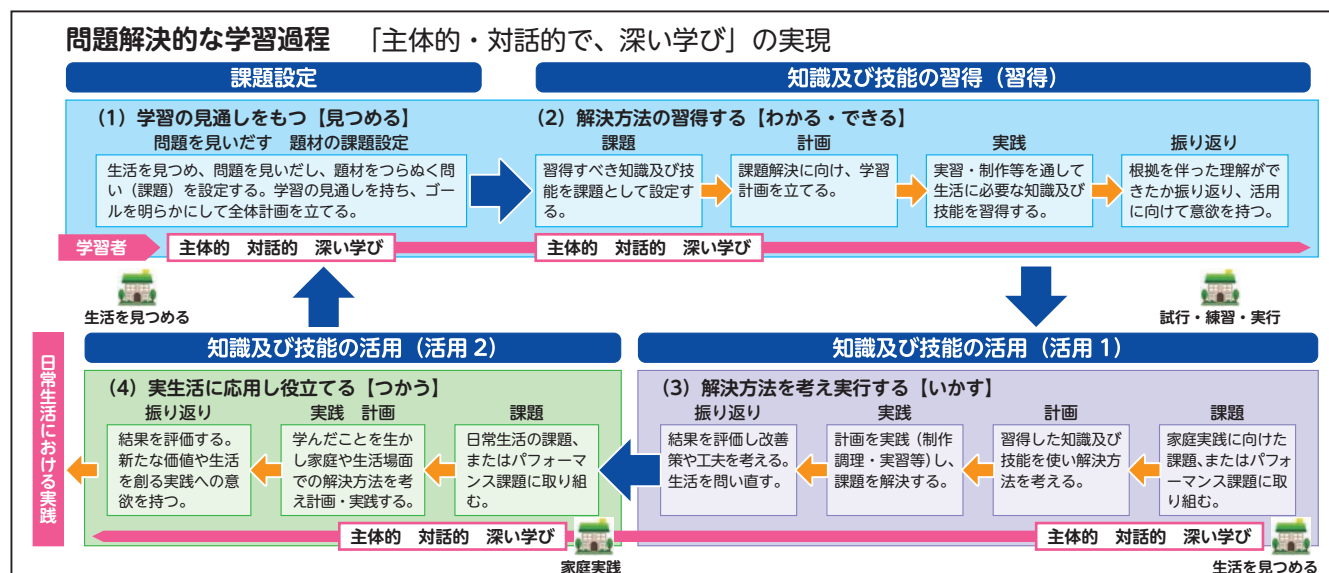
○地域の方からの感想を児童に伝える

既習の知識及び技能を総合的に生かす場面を作り、実際に地域の方に手作りの布袋をプレゼントしたことは、児童の自信につながり、実践への意欲の向上につながった。本実践により、自分の学びに価値付けがなされ、家庭や地域との深いつながりにも気付くこととなった。



◀ 詳しくはこちらへ

表1 佐賀県小学校家庭科部会作成 問題解決的な学習過程「主体的・対話的で深い学び」の実現



自ら学ぶ意欲を 高める学習課題の設定

—「アイデアを形に」3D プリンタを
使用した便利グッズの製作—

北海道教育大学附属
札幌中学校主幹教諭

佐藤 敦

1 自ら学ぶ意欲を引き出す 学習課題の設定

生徒の主体的な学びを引き出すためには、生徒が学習内容をより「自分ごと」として捉え、生徒自身が目指すゴールや何をすべきで、何が足りないかなどを明確にする必要がある。

そこで、櫻井（2020）の研究をもとに、自ら学ぶ意欲（自律的な学習意欲）を高めるために学習意欲を次のように細分化し、学習課題や生徒の学習活動とつなぎ合わせた。

- (1) 内発的な学習意欲…学習テーマの設定
- (2) 向社会的な学習意欲…問題の背景と課題の見通し
- (3) 達成への学習意欲…全体の学習課題の設定
- (4) 自己実現の学習意欲…自分自身の授業ごとの課題

図 1 自ら学ぶ学習意欲の細分化

2 技術ガバナンスレビュー学習

問題解決的な学習に入る前に、身近な生活にあるアイデアに気づくために、技術ガバナンスレビュー学習を行った。技術ガバナンスレビュー学習では、さまざまな形状をしたハサミを取り上げ、ハサミの形状に込められた工夫や用途などについて考察した。生徒は、実際に厚さの違う紙（上質紙と段ボール紙）を切断しながら、ハサミの形状がどのような役割を果たしているのかを考え、「支点、力点、作用点の位置関係が、少ない力で厚い紙を切断するのに関係がある」「刃が曲がっていることで、ペットボトルなどの曲面を切断するのに適している」など、使用者のニーズに応える技術イノベーションに気づき、発明や知的財産を身近に感じたようだった。



これらのハサミを用いて、上質紙と段ボール紙を切断してみる。

ハサミの形状が果たしている役割を考える。

使用者のニーズに応える技術イノベーションに気づく。

図 2 さまざまな形状をしたハサミ

3 学びの過程を視覚する ワークシートの工夫

学習課題や取り組むべき道筋を明確にするためのワークシート「開発の設計図」を活用する。このワークシートは、取り組んできた過程を記入することで、便利グッズに込められた工夫などの情報を共有し、

便利グッズを検討する際に改善点を見つけやすくなり、よりよい方法を検討しやすくなりするねらいがある。生活の中のさまざまなモノに込められたアイディアに関心をもち、よりよいモノを創り出す楽しさを感じられることを期待した。

【問題の発見と課題設定】

製作の背景を具体化することで向社会的な学習意欲につなげる

【開発の記録】

製作して気づいたことや次回取り組む内容などを記録し、自己実現の学習意欲につなげる

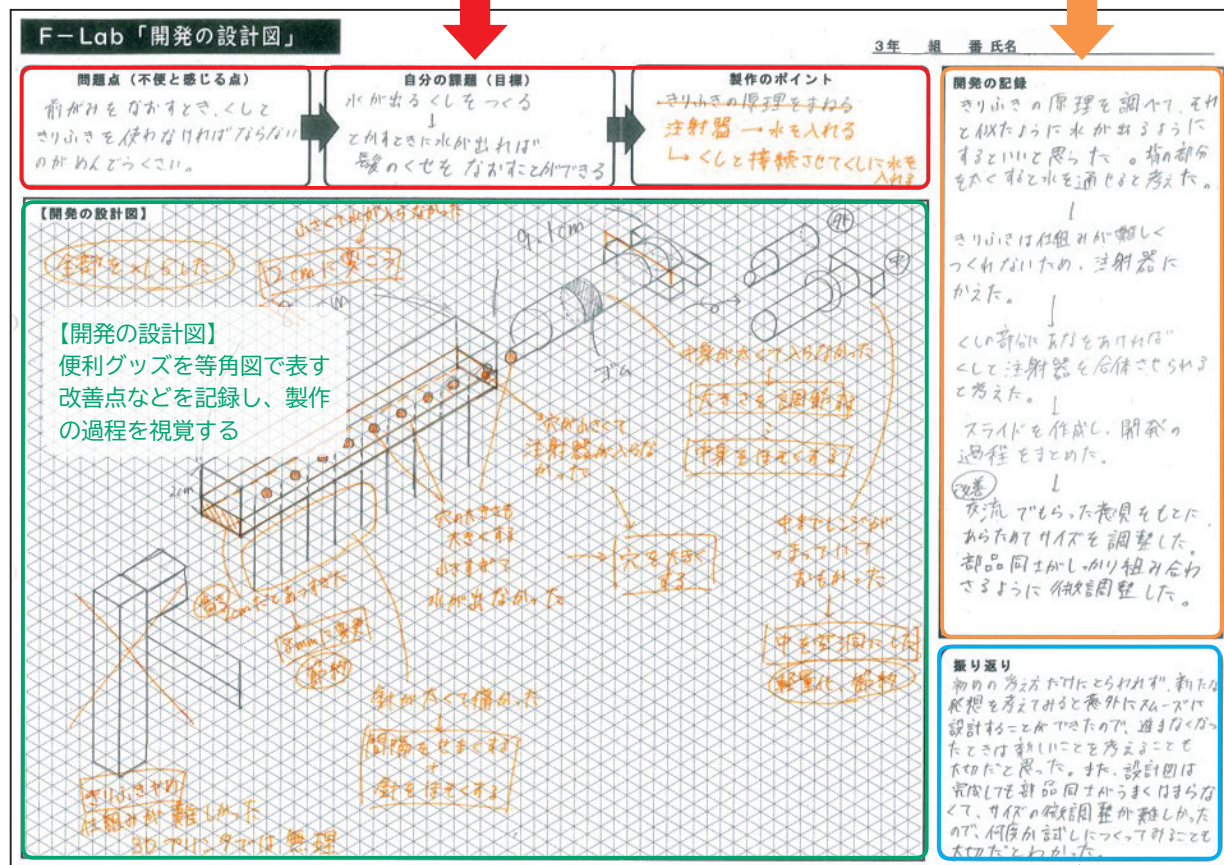


図3 「開発の設計図」学習課題や製作の過程が視覚化されたワークシート

【ふり返り】

製作を通して気づいたことや感じたことをまとめる

4 成果

課題が細分化され、学びの過程が視覚化されることで、生徒は取り組むべき課題が明確になり、製作したものが期待する動作をしないなどの困難な局面になったとしても、試行錯誤しながら粘り強く課題解決に向かう姿が多く見られるようになった。

【参考文献】

- ・「学習指導要領解説技術・家庭科編」文部科学省（2017）
- ・川路智治ら「技術科における『技術ガバナンスレビュー学習』の授業開発と実践評価」『科学教育研究』44巻1号（2020）所収
- ・櫻井茂男『学びの「エンゲージメント」』図書文化社（2020）



図4 生徒が3Dプリンタで製作した便利グッズ



◀ 詳しくはこちらへ

ふり返りを記述するワークシートには、やや厚みのあるカラー上質紙を用いてファイルする。これを生徒との間では「題材の表紙」と呼称している。ふり返りを記入するのは裏面部分の「学びの記録」(14ページ下図)で、授業や内容の区切りごとにふり返りを記述する。1枚の用紙に記入していくことで、学んできた内容やそれをどう生活に生かそうと考えたかなど、自分の姿をふり返り、新たな課題や再度取り組むべきことに気付く。

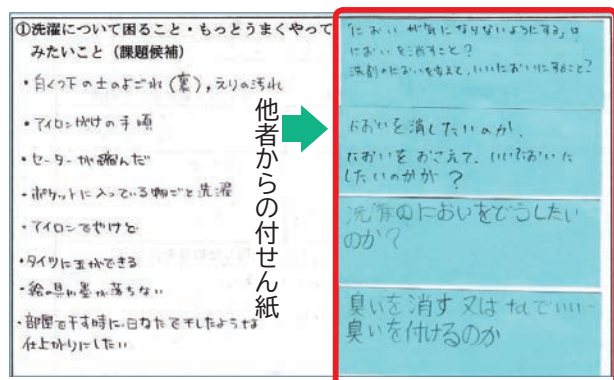
図のA欄：それぞれの学習内容における自分の学びの姿を確認。B欄：その学びを次の学びや生活、あるいはほかの教科や領域の授業でどのように生かせると思うかを記述する。

③ 内容のまとまりをふり返る工夫

(図で示した「学びの記録」の反対面(表面)は、Web ページに掲載)

(3) 相互評価による自己評価力を高める工夫

B (7)「衣生活の課題と実践」で「家族の衣類の洗濯と手入れ」の中から自分の課題を設定する場で、課題設定の手順を確認したり、課題設定の理由を表現したりできるワークシートを工夫した。

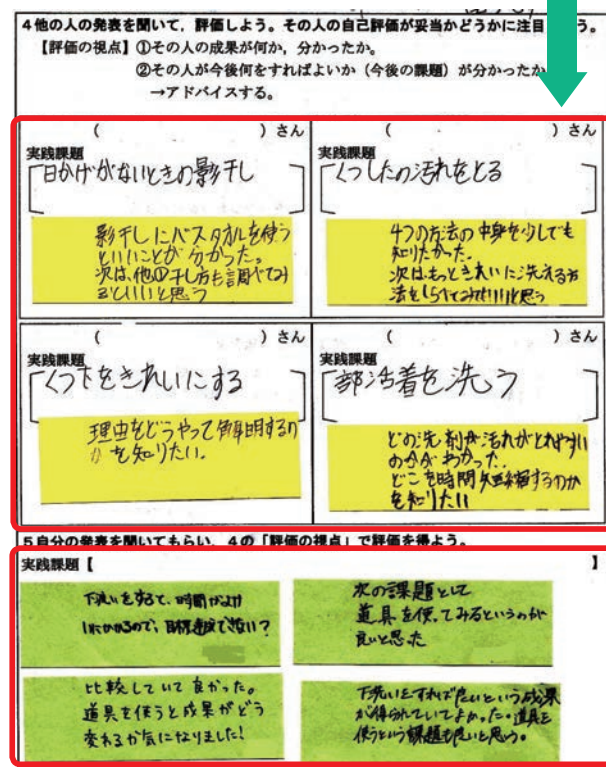


各自が仮に設定した課題について、グループ内で説明し合い、付せん紙を用いて相互評価したことを踏まえて、課題を設定する。

また、実践の計画や実践結果の発表を相互評価する際に、付せん紙の間に複写紙を挟んで記録することで、同じものを2枚作る。上図のように、それぞれの生徒は1枚を自分のワークシートに貼り、もう1枚を評価の相手に渡すことで、他者への評価内容と他者からの評価内容の両方を1枚のワークシートに残せる。このことで、自分が他者をどう評価した

か記録し、評価力を高めることができる。

自分の発表について評価を受ける欄
付せん紙は他者が書いたもの



自分が他者の発表を評価する欄
付せん紙は自分が書いたもの

3 研究の成果と課題

日々の授業実践の中で、論理的に評価する場面を積み重ねたことにより、確かな手応えを感じている。以下は半年間の授業を経た、本年度の2年生のふり返りの言葉である。

- ・僕は、色々な洗濯の記号に興味を持ちました。記号の勉強をしてから、この服にはどんな記号が付いているんだろうと自分で確認してみるようになりました。見ているときに、親に「何しているの?」と聞かれ、それについて解説したあと、たくさん勉強したんだな、と自分で思い、とても嬉しかったです。
- ・いつもの母の洗濯方法と比べながら、洗濯に取り組んでみました。すると、間違っていた洗濯方法と課題を見つけ出すことができました。この学習を通して、自分の家での課題を見直し、課題解決方法について考えました。私の家では、何もかも一緒に干していたことが課題でした。これからは、新しく買った服の取り扱い表示に目を通して、洗濯方法を家族と相談する事になりました。

(本研究・及び授業実践は、2022年8月3日第72回全国家庭科教育協会研究大会において発表したものの要約)



◀ 詳しくはこちらへ

インフォメーション

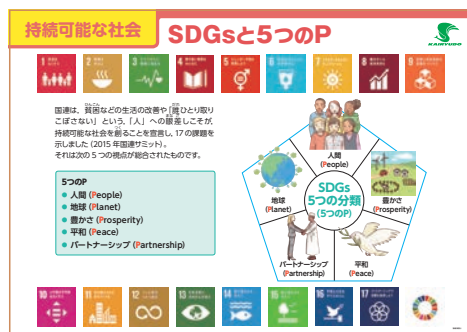
商品案内

教室に貼って、いつでも確認

掛図セット [技術分野] [家庭分野]

■定価 各 5,500 円
(本体 5,000 円)

■A1 判 / 10 枚セット



- 技術室や家庭科室などに常掲する掛図セット。
- これまでの教授用掛図の内容を改め、常掲用掛図に特化しました。
- いつでも生徒が目にすることができるため、安全に関する注意喚起などに役立てることができます。

収録掛図 ー技術分野ー

安全で快適な作業をしよう (1)、(2) / 製図

修正のしかた / 定植後の管理作業 / さまざまな発電のしくみ
整備用の工具と整備例 / アクティビティ図とフローチャート
キーボードの例と日本語入力の方法 / Society 5.0

収録掛図 ー家庭分野ー

調理実習の安全 / 製作実習の安全 / 地震に備えよう
幼児の発達 / いろいろな切り方 / 生鮮食品の鮮度と保存
ミシンの上糸と下糸の準備 / 衣服の手入れのための取扱い表示
インターネット通販を安全に / SDGs と 5 つの P

New!

小学校 資質・能力を育む

家庭科の授業づくりと評価

■筒井恭子 編著 ■B5 判 144 ページ

■定価 2,200 円 (本体 2,000 円)

- 小学校家庭科の内容や主体的・対話的で深い学び、ICT (1人1台端末) の活用、学習評価等について、わかりやすく解説しています。
- ページ右上のQRコードからは、1人1台端末でも活用できるワークシートなどの資料をダウンロードできるので、すぐに活用することができます。
- 現代的な諸課題に対応した実践や、SDGs との関連を図った取り組みを3例紹介しています。



KGK ジャーナル

Vol.57-1 (通巻 409 号)

非売品

令和 4 年 11 月 1 日印刷 令和 4 年 11 月 10 日発行 編集兼発行人 岩塚 太郎
発行所 開隆堂出版株式会社 〒113-8608 東京都文京区向丘 1-13-1
☎ (03)5684-6121 (営業)、5684-6118 (販売)、5684-6116 (編集)
<https://www.kairyudo.co.jp/>



開隆堂出版株式会社

本社 〒113-8608 東京都文京区向丘 1-13-1 ☎ 03 (5684) 6111

北海道支社 〒060-0042 札幌市中央区大通西 11-4-21 52 山京ビル 7 階
東北支社 〒983-0852 仙台市宮城野区榴岡 4-3-10 仙台 TB ビル 4 階
名古屋支社 〒461-0004 名古屋市東区葵 1-15-18 オフィスサンナゴヤ 9 階
大阪支社 〒550-0013 大阪市西区新町 2-10-16
九州支社 〒810-0075 福岡市中央区港 2-1-5 FYC ビル 3 階

☎ 011 (231) 0403
☎ 022 (742) 1213
☎ 052 (908) 5190
☎ 06 (6531) 5782
☎ 092 (733) 0174